

オマーンの首長アマル・ブン・アル・アースがマディーナに出る オマーンの民がイスラームに従うようになったことを述べて(p124)

アマル・ブン・アル・アースはその3年間をオマーンで過ごした。善行を命じ、否認された事を禁じ、イスラームの命令を普及しながら、また人々に彼らの宗教の事柄を教えながら。その後マディーナへ戻ろうと考えた。彼の唯一の使命について述べ、彼の肩に負わされた義務を(オマーンの首長職を継ぐ)責任者にもたらす為であった。それから、イスラームの首都であり、宗教の本拠地であるマディーナへ戻って出て行くことを決めた。

彼(アマル・ブン・アル・アース)の同行の為に、高潔の士であるアブド・ブン・アル・ジュルンディ、彼は王の代弁者であり、神の使徒の使徒であるアマル・ブン・アル・アースの支援者であるが、義務を遂行しながら、オマーンにおけるイスラームの代弁者である威厳のあるクライシュ族の首長(アマル・ブン・アル・アース)を力付けし、オマーンの民のイスラーム化の実現をしながら立ち上がった。彼と共に彼の部族の傑出した人物達の中から宗教学者の男達を選んだ。例えばジャアフル・ブン・ジャンム・アル・アタキー、またオマーンに居たアズドの男達の大物からアビー・サフラ・サーリフ・ブン・ザーリムであった。当時の彼等の事を考えると、これまでに彼について述べてきた様に、この男こそ最も優れたオマーン人の一人であった。

高貴な者達を考察すると、オマーンの歴史やその他が述べていて、これから耳にする一連のオマーンの傑出した人物と共に、彼には、アズド族やアブドルカイス族の護衛達が同伴していた。(この事は)当時のアラブの諸問題に応じて、彼の道中において彼等を信じての事であった。彼はヒジュール(現サウジのアル・アハサー地方)に居たバハレーンの統治者ムンジル・ブン・サーウィの処に立ち寄った。そしてバヌー・ハニーファ族の処を過ぎ、それから彼等から護衛を得て、バニー・アーミル族の地まで行き着いた。そこからクッラ・ブン・フバイラ・アルクシャイリーの処で泊まった。クッラ・ブン・フバイラはアマルと共に彼(クッラ)の部族の百人の男を彼の護衛として出て行った、と言われている。彼(イマーム・サーリミー)が言っている。「アマル・ブン・アル・アースが進んで行くと、人々がイスラームから背教者になっているのに出会った。(P.125)そしてどうこの話が彼の処に達した。オヤイナ・ブン・ヒスンがマディーナから出かけている時にアマルと遭った。この事は丁度アブー・バクルの処に着いた時のことだった。オヤイナが言った。「オヤイナよ、貴方が我々の為に何かしたら、我々は貴方の背後にあるものから貴方を守る。嗚呼オヤイナよ、人々が諸事を任せているのは誰か？」彼は言った。「アブー・バクル」。アマルが言った。「神は偉大なり」。オヤイナが言った。「嗚呼アマルよ、我々と貴方達は同じだ」。するとアマルが言った。「嘘付きめ、このムダ族の最悪の奴よ」。彼(イマーム・サーリミー)が言っている。「そしてオヤイナが出て行くと、人々の中で彼に会った者に、『自分達の財産は自分達のために取って置きなさい』と言い始めた。すると人々は、『貴方は何をするのか』と言った。アマルは言った。『(オヤイナの出身である)ファザーラ族の男は山羊一頭も支払わない』。それ以来オヤイナは、トライハ・アル・アスター(ブン・フワイルド:イスラーム離反運動(リッダ)の折の有名な反イスラームの将軍名。敗北と共に直ぐに入信)と合流した。それから彼と共に居た。ハーリド、即ちイブヌ・アル・ワリードがバニー・アーミル族の礼拝所から出て来た時、アマルが上述のオヤイナ・ブン・ヒスヌに対し、恐れ知らずのライオンの一撃で襲い掛かった。そして彼に足枷を掛け、一緒にクッラ・ブン・フバイラ・アルクシャイリーを繋いだ。そしてアブー・バクル、彼に神が嘉せんことを、彼の処に二人を送った。

イブン・アッバース、神が彼等を嘉みし給わんことを、彼が言った。「彼は二人を足枷のまま連れてマディーナへ行った。私がオヤイナを見ると手を首に紐で結ばれ、マディーナの少年達に椰子の枝で突き、そして彼を打ちながら、『神の敵よ、お前は(神を)信仰した後で、神を不信仰の者となったのだ』と言いながら。すると『私は神を信じたことはなかったのだ』と彼は言った。(イブン・アッバースが)言った。「アブー・バクル、神が彼を嘉みし給わんことを、彼はクッラを罰せず、彼を許した。(イブン・アッバースが)言った。「また彼は彼に保証書を書き、オヤイナにも保証書を書き、そして彼(オヤイナ)は彼(アブー・バクル)に従った。私(イブン・アッバース)は言った。「正にこの事は、彼らの心を協調させたこの者達に関してのアブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼の策略であった。そして損得勘定においては、アラブ人を静め、彼等の

恐れが沈静化する為に、豊かな取り分があったのである。つまりイスラーム以前の時代の性向に対する彼等の追憶は近かったのだ、悪魔が夜となく昼となく彼らを訪れ、彼の不信心を彼等と呼び掛けていたのだ。また(イブン・アッバースが)言った。「イブン・アルアシールの書「カーミル」では、神の使徒は亡くなった時、アマルはオマーンに居た」。彼(イブン・アルアシール)が言った。「アマルが更に近付き、とうとうバハレーンに辿り着いた。すると彼はアルムンジル・ブン・サーウィが亡くなっているのが分かった。そこから出てバニー・アーミル族の国へ行き、クッラ・ブン・フバイラに処に泊まると、クッラは、片足を前に進め、他方の足を遅らせていた。即ち背教状態にあったのである。悪魔が彼を引き倒す為に、彼を弄んでいたのだ。 (P.126) 彼(イブン・アルアシール)が言った。「彼と共にバニー・アーミル族の軍が居た。彼(クッラ)は言い、そして彼(アマル)の為に家畜を屠り、彼の宿舎を貴賓扱いとした。彼が出立を望んだ時、クッラは彼を一人にし、そして言った。『嗚呼、これは何たることか！ 正にアラブ人達はイターワによって汝達を、心理的に喜ばせはしないだろう』。即ちそれ(イターワ)は財産税のことで、ザカート(喜捨)のことを意味してはいたが、つまり彼はそれを税のようなものと思っていた。

彼(クッラ)は言った。「もし汝達が彼等(アラブ人達)に対して、彼等の財産を得る事を許せば、彼等は汝達に耳を傾け、従うことになるだろう。そしてもし汝達が拒否すれば、彼等は汝達に同意しないだろう」。するとアマルが彼に言った。「我々をアラブ人達として恐れさせるのであれば、嗚呼クッラよ、私は汝が信仰者でないと言おう。神かけて、私は汝の母親の小屋の中にいる汝を馬に踏みつけさせよう」。小屋と言ったのは、住むには卑しむべき家のことだ。この事は、威厳のあるクライシュ族の知恵者から脅しであった。神は彼等の努力において真摯である全ての彼の同朋の様に、彼にイスラーム支援に集中するようにと彼を遣わしていたのだ。そしてその事の中に、宗教の支援、ムスリム達の基盤の強化があった。(イブン・アルアシール)が言った。「彼(アマル)はマディーナにいるムスリム達の処へ来て、彼等に知らせると、彼等は問いかけながら、彼の周りを取り巻いた。それから彼は彼等に伝えた。軍はダバー(注:オマーンのソハールにある戦場名。ジャイファルとアブドガルカイト・ブン・マールクと戦った)からマディーナへ向かっての陣営を張り、来ている」。 (イブン・アルアシール)が言った。「つまり分散したり、円陣を作ったりしている」。そしてオマルが、アマル・ブン・アルアースへ挨拶を求めて向かった。すると円陣を通りかかると、そこにはアリー、オスマーン、タルハ、アルズバイル、アブドルラフマーンとサアドが居た。(イブン・アシール)が言った。「オマルが彼等に近付いた時、彼等は黙った。彼、即ちオマルが、貴方達はどうしたのか、と言ったが、彼等は彼に答えなかった。そこで彼は彼等に言った。「貴方達が言っている事には、クライシュ族に対する無数の殺戮、捕囚、根絶等で、クライシュ族の身の上に起こる事で我々を最も恐れさせる事であろう。何故なら神の使徒は彼等の中から出てきて、彼は命令者であり、実行者である。そしてクライシュ族は彼の部族で、彼等は彼(神の使徒)と共に居るからである。この事は、このことに対する神からの彼の特別のひらめきのように見えた。そして彼が彼等に対してこの言葉を書いた時、彼等は彼に言った。「貴方の言葉は正しい」。オマルが言った。「彼等を恐れることはない。神かけて、アラブに対して私は貴方達に近い。貴方達にとっては、アラブ人達からの神に対する欺きが、私よりも恐ろしいのである。神かけて、貴方達がクライシュ族に一石を投じたら、アラブ達が貴方達の後を追って彼等の処に入っていくであろう。この事は私は言った。それは神の使徒からそれを知った時の事であったが、即ちそれで人々が言っているのである。「クライシュ族では、ムスリムはムスリムに従い、不信心者は不信心者に従っていた」。そして彼の言葉は「クライシュでのこの事は、未だに彼等の中で2(種類)の男が残っていることである。もしくは彼は言った。「彼等の中で2人しか残っていない」と言う別の表現もある)。もしくは(預言者)彼に神の祝福と平安があれ、と言っていた如くであった。オマル・ブン・ハッターブの心には(P.127)、神の定めを道を行く彼(ムハンマド)から知った真理と燃え盛る様な彼のひらめきで理解したことを実行することが根付いていた。彼に神が慈悲を与え、彼を許し給わんことを。

この政治的な言葉によって、彼は部族の怖れを鎮め、彼等の怒りを鎮め、彼等の良き未来により彼らを喜ばせたのであった。オマルが言った。「彼等、即ちアラブ人達の中に居て神を畏れよ」。 (イブン・アルアシール)が言った。「そしてオマルが続けた。つまりクッラ・ブン・フバイラを、捕虜として連れてアブー・バクルの処へ行くと、オマルはアマルを彼(クッラ)のイスラームへの改宗の証人に頼んだ。するとアブー・バクルがアマルを連れて来て彼に尋ねた。するとアマルが彼(アブー・バク

ル)に、二人がザカートの話題に至ったクツラの言葉を伝えた。するとクツラが言った。「嗚呼アマルよ、猶予を」。彼(アマル)は言った。「否、神かけて、その全てを私は彼に告げよう」。そしてアブー・バクルは彼(クツラ)を許し彼のイスラーム改宗を受け入れた。彼(クツラ)の言葉は次の様であった。「二人がザカート(の話題)に至った時、『嗚呼アマルよ、猶予を』とクツラが言ったが、即ち彼に告げないで欲しい」、と言うことであった。つまりその事は本質的な事柄であった。「否、その全てを私は彼に告げよう」とのオマルの言葉は、その事がイスラームでは宗教的信頼性の必須であり、アブー・バクル、神が彼を嘉せんことを、彼の施策の中のイスラーム共同体が構成しているもので、その人々の恐れを鎮め、騒ぎを治め、イスラーム(が投げ掛けた)石が互いに胎動するためのものであった。

その男達には、タイミングにその様なものがある様に、策略があった。イマーム(サーリミー)が言った。「イブン・アルアシールも彼の書カーミルの中で、オスマーン殺害後、アマルがムアーイヤへ行つた事を述べている」。彼(イブン・アルアシール)は言った。「誰が(オスマーンの死後カリフ)になるかを既に彼(アマル)は知っており、彼に対して行動していた。何故なら預言者が既に彼(アマル)をオスマーンへ派遣していたからであった。つまり、そこでの情報の中で、確証を知るに至つたものを聞いていたのであった。つまり彼は彼(前述のユダヤ人)に預言者の死について、彼の後は誰なのかを尋ねた。すると彼は彼に、アブー・バクルだという事、彼の任期は短く、それから彼の如く彼の後は彼の部族の男が継ぎ、任期は長い暗殺される、彼の後は彼の部族の男が継ぎ、任期は長いが民衆に殺される」。彼は言った。「これは最悪で、彼の後は彼の部族の男で、人々が彼に対して反乱し、激しい戦争が彼の(統治の)最初にあり、人々が彼に同意する前に殺される。(P.128)それから、彼の後は聖地(パレスチナ)の首長が継いで、その統治は長くなり、このグループの民が彼に合意し、死亡することになる」。

任期が長く、暗殺された男こそオマル・ブン・ハッターブ、神が彼を嘉せんことを、その人であり、任期が長く民衆に殺された男で言わんとしたのは、オスマーンのことである。即ち、多方面からムスリム達が彼(オスマーン)の処に集まり、彼が殺害されるまでの間、彼の家に居る彼を取り囲んだ。彼の(任期の先)最初に激しい戦争があり、人々が合意する前に殺された男とはアリー・ブン・アビー・ターリブのことである。聖地(パレスチナ)の首長で、その統治は長かった男とは、ムアーウィア・ブン・アビー・スフヤーンの事であり、既にイブン・アルアシールが、この件に関して、彼の著アルカーミルの中で、彼(ムアーウィア)の事を知っている人達の言う事を伝えて述べている。その意味するところはアマル・ブン・アルアースが、ムアーウィア・ブン・アビー・スフヤーンの立場に傾いていたという事である。即ち彼は諸問題が、彼に言われた通りに展開されて行くと思っていた。つまりそれ(諸問題)は彼に言われた通りだったのであった。

確かに、彼の部族で唯一の聡明な人物アマル・ブン・アルアースの如き者は、諸事件を核心を見る眼で見えていたのであり、それ(諸事件)について彼に言われた様に、彼はそれにおいて牛後(尻尾)である事に満足せず、それどころかそこでは鶏頭であり頂上であることに満足する(様な人物)であった。アマル・ブン・アルアースはこの事を、ソハールにいるユダヤ人達の一人から受け取っていたのである。イブン・アルアシールが指摘しているように。

イマーム・アッサーリミー、彼に神の慈悲があらんことを、彼はオスマーンの民のイスラーム化について、(彼の著書)「名士録」の中で言っている。「そしてアルハミースの歴史の中で次の様に言われている」。即ち「アマル・ブン・アルアースはオスマーンに対する預言者の総督であった。ある日、オスマーンのユダヤ人達の一人が彼のところへやって来て、彼に言った。「もし私が貴方にある事を尋ねたら、私は貴方が(次の様な人物であると)見ているのだが、私は、私の身の上にかかる事で貴方を恐れる事になるだろうか」。アマルは「否」と言った。そのユダヤ人が、「私は神にかけて貴方に(答えてくれる様に)望みますが、誰が貴方を我々の処へ送つたのでしょうか」と言った。アマルが、「おお神よ、神の使徒が」と言うと、ユダヤ人が「神よ、貴方は彼が神の使徒であると知っているのですね」と言った。アマルが言った「おお神よ、その通りです」。それからユダヤ人が言った(P.129)。「何故なら貴方の言っていることがもし本当だとしたら、神の使徒は今日と言う日に、既に亡くなってしまった」。アマルがその事を理解した時、彼の側近達や彼の供の者達を集めた。ユダヤ人が彼に話し話したその日の事を、彼(イマーム・アッサーリミー)は記録した。「それから道中、彼が信頼しているアズド族とアブドルカイス族からの護衛を連れ

て出た」。彼(イマーム アッサーリミー)は言った。「つまりその事は、突然彼に到来したことで、アブドルムンジル・ブン・サーウィの元で起こった。それから彼は、ハニーファ族の地に到来するまで進んだ。そして彼等から護衛を得て、アーミル族の地まで来て、クッラ・ブン・フバイラ・アルクシャイリーのところに泊まったのだった。彼(アマル)は我々が提供した伝聞を(クッラに)述べた。その内容は「アマル・ブン・アルアースが、ソハールで預言者の死去について話したあのユダヤ人から重要な情報を得た事である。つまりアマルはそれ(死去の情報)に依って、彼の人生を歩んだのであった。つまり彼は、それ(死去の情報)があのユダヤ人が言った様に、起こっていくと見做していた。それ故、アマルは、機会が到来し、彼にとって相応しいことに沿って活動したのであった。事態は彼の眼に明らかで、あのユダヤ人が言ったことは正しい、と言っても遠くはなかったのである。何故ならユダヤ人達は、神が彼等にトーラー(モーゼ5書)を与え、そしてその中で神の使徒(ムハンマド)のことは神は率直に述べ、そして彼の民族と彼らの間に生じる事、彼等に敵対する者に対する勝利、彼等と争う者に対する凱旋が彼等に起こるであろう事についてはっきり述べられている。

既にユダヤ人達は、マディーナでオマル・ブン・ハッターブに言った。「我々は、トーラーの中で貴方を見つけている」。彼は言った。「貴方達は私をどの様に見出しているのか？」彼等は言った。「我々は貴方が絆であると見做している」。彼は言った。「何の絆であるか？」彼等は言った。「鉄の絆だ」。この様な事は、預言的な言葉をもって以外に人々は理解しない。前述の諸書にあるこの共同体の記述は正しい。(この事は)モーゼ(ムーサー・ブン・イムラーン、彼に祝福と平安があらんことを)、聖板に(十戒の神よりの)教えにある様なものを望んだほどのものだった。ソハールのユダヤ人が言った事は実際のことだった。又アマルは、現世を望み、それに傾倒する有名な男達の一人だった。

イマーム(サーリミー、彼に神の慈悲があらんことを)が言っている。「アマル・ブン・アルアースが、オマーンのアズド族の男達と共に、アブー・バクル(彼に神の慈悲があらんことを)の処へ行った。するとサーリフ・ブン・ザーリムが話し手となり、立ち上がった」。そして彼(サーリフ)は言った。「やあ、神の使徒の後継者で、クライシュ族の人よ、これはかつて我々が手中にあった信頼であり、(P.130)我々の保護の中あった神の使徒に対する信託です。それ故貴方の許へ(派遣された事で)我々はこれから解放されたのです」。するとアブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼が言った。「神が貴方達に善き報酬を与え給わんことを。彼等にムスリム達が善き賛辞を与え給わんことを」。そして語り手達が彼等に対し賞賛の言葉で褒め称えた。つまり彼等は(こう)言ったのだった。「神の使徒の言葉と彼の貴方達に対する賞賛の言葉が汝達、アズド族を守らんことを」。それからオマーンの総督であるアマル・ブン・アルアースが立ち上がった。と言うのは、アズド族について語る時以外、彼は賞賛や賛辞のような事を祈る事はなかった。それから、アズド族の支援者達や彼等以外の面々が、アブドと彼の供の者達に挨拶しにやって来た。翌日になり、アブー・バクルは命じた。つまり神の使徒と共にマディーナに移動した人々(ムハージル)と支援者(アンサール)を集めた。そして彼は話し手として立ち上がった。神を讃えて、賛辞を贈った。そして預言者を語り、祝福し、次の様に言ったのであった。

「オマーンの民の縁者達よ、貴方達は、自発的にムスリムとなり、神の使徒が、貴方達の地を軍靴でも、馬の蹄でも踏みつけることはなかった。そして他のアラブ人達が担ったものは何であれ、貴方達も担った。個々に散らばる事もなく、集団が分散することもなかった。つまり神は、貴方達を善き事の上に集めたのである。そして貴方達の処へ、軍隊も、武器持たせないで、アマル・ブン・アルアースを派遣したのである。貴方達は彼に依って。彼は貴方達の家から遠く離れた貴方達に呼び掛け、貴方達の(兵員の)人数の多き時にも、そして度重なり貴方達に命じた時も、貴方達は彼を視野に入れていた。如何なる徳が貴方達の徳以上に敬虔であろうか、又如何なる行為が貴方達の行為以上に誉れ高いであろうか。神の使徒の言葉が約束の日まで、貴方達を守って下さいますように！それからは、貴方達の中にアマルが誉ある者として滞在し、貴方達の元を旅立っていったのである。即ちイスラームの挨拶を受ける者としてとして旅立ったのである。神は貴方達に、ジュルンディーの二人の息子アブドとジャイファルのイスラームへの改宗で祝福を賜っていたのである。神は彼(アマル)により貴方達を強くし、貴方達により彼(アマル)を強くしたのであった。貴方達は、神の使徒の死亡知らされるまで最善の状況にあったのである。貴方達の徳を倍増するものを貴方達は現わしたのであった。即ちその事とは、真理(神)の教えへと

貴方達が導かれた事であり、貴方達がそれ(真理)を強くした事であった。何故なら神の使徒の死亡の知らせが貴方達に着いたとき、貴方達は人数も多くあったにもかかわらず、貴方達はしっかりとイスラームに確固し、貴方達以外の人々がぶれるようには、ぶれることはなかったし、他の人達のように、あちこちと落ち着かないこともなかった。

アブー・バクル、彼を神が嘉せんことを、彼が言った。「貴方達は、我々が貴方達を讃えた立ち位置にたった」。その事は彼等が真理(神の教え)の上に確固として、それ(真理)を彼等が助けと支持したということだった。(P.131)また言っている。「貴方達は助言に忠実であった」。即ち、貴方達は、それ(助言)に誠実で、それを正直に守っていたのだ。また言った。「貴方達は精神もお金も共有し、人々を自由な行動をやっているときに、神が貴方達の舌の(言葉)を固定し、貴方達の心導いた。人々が移ろう時に」。即ち人々には、(預言者の死に際して)ぶれること、困惑、驚愕は避けられぬものだった。また彼(アブー・バクル)は言った。「貴方達に対する私の良い思いの元に居るように」。即ちそれは貴方達の信仰に対して、そして貴方達のイマームに、貴方達の指導者への服従において強い確固さを保つことである」。また(アブー・バクル)言った。「貴方達の身に起こる事で、貴方達が貴方達の国を制していることを私は決して恐れてはいない」。即ち、貴方達は、ペルシヤの兵と長い間戦い、とうとう彼等を絶滅させたからである。また「つまり貴方達の身の上に起こる事で、不可視に対する判断ではなく現状に応じてみると、彼等(ペルシヤ人達)の後、(誰が来ようが)何人をも私は危惧していない」。そして言った。「貴方達の信仰から離脱することを危惧していない。即ち状況が示している事が、それを不可欠としており、神の使徒からの言葉が示している事が、そのことの証左である。寛大なる読者は、神が望まれるなら、この書の中のオマーンの民の徳に関する事箇所を精緻することになろう。

「貴方達に神が善き報酬を与え給わんことを」と言ってから、アブー・バクルは黙った。これまでに、規則を作り、躰をし、力付け、支え、警告し、呼び掛けそして正しい道を示してきた。伝導者達はかくの如きであった。それに則って、神の教えの旗が頭上高く立ち上がる。素晴らしきかな！ムスリムの主、誠実な選ばれた者の後継者(カリフ)であるアブー・バクル。